

玉章

室生犀星

青空文庫

故郷ふるさとにて保則やすのり様、十一月二十三日の御他界から百日の間、

都に通じる松並木の道を毎夜参りますうちに、冬は過ぎ春がおとずれ、いまでは、もう、松の花の気はいがするようになりました。御身おみさまも、なぜ、わたくしがかくも寥さびしい松並木の道をおとずれるかについて、きつと、奇異な思いを抱かせられることと思えますが、それをあからさまに申し上げれば、ただ紀ノリスケ介様にお目もじりたいばかりの夜歩きに違いないと申す外はございません。お亡くなりになられた方にお目にかかるということは変な言葉のようにきこえますけれどそれは何時いつも都からお越しの折に、あれらの松並木の道をおとoriになつていたということだけで、わた

くしには生きた思いがいたして来るのでございます。かつての紀介様のお踏みになった土地や、お目にとまった松並木の松の木や、土手や、小さい丘や、涼しい蔭なぞには、過ぎた日の紀介様のお眼がありありとみひらかれて映^{うつ}つてまいります。あそこまで参れば、わたくしの耳は紀介様のお声をきくことができます。機械^よ嫌^よかつた日のお笑いごえを耳に入れることもできます。わたくしの耳は松並木にまいれば、ひとりでに^{あか}赧^{あか}らみ、しずかに物声にきき入ろうとする用意をするようになりました。たんに耳ばかりではございません、わたくしの五体があそこではそれぞれの記憶のなかに、手は手、胸は胸、脇の下までが別々の感じをもとめ、そして別々の思いに耽^{ふけ}つてゆくのでございます。ことさらに胸に

のこった紀介様のおからだの重みも御身様の前で申し上げるのも何となく気が負けるひような気になりますけれど、人の美しいいちからはどのようなにしても、滅びきらないものに思われます。かつて紀介様はいつか何かのまぎれに、ふいにお仰せおになつたことがございました。人の思いは何百年とか何千年とかいう永い歳月をもた、一呼吸ひといきに次の時代の人に移つてあらわれることがあるものだ、まるできのう考えたような新しい思いをそのままに移しかえてくるから妙だ、人間の考えたものの前では、永い歳月などというものは有りえない、よい人間の考えたことは全く今すぐに思いついたことと同じ程度に新しいのだ、と、こういうふうに仰有おっしゃったことがあります。実際人間は亡くなつても、それを考える

ときはすぐきのうお亡くなりになったとしか思われなくらい近い日を考えるようになるものでございます。

こういう毎夜のわたくしの歩みはいつも、松並木のなかばまで参りました時に、きつと一応立ち停^どまって見るのがつねでございました。それは前のたまずさにお示したようにふしぎな一つ家の灯^{とも}びがもとでございました。どういう晩にも点^{とも}れていない日はなく、そして決してわたくしが館^{やかた}近くにもどりかけ、灯^{とも}びにうしろを見せる時分にふつと消えるのが毎晩の例でございました。保則さま、ご免^{めん}あそばせ、しまい^{おみさま}にわたくしは御身様があそこにお住みになられているのではないかと、そんなふうにかえることもございました。わたくしの生涯をかげのかたちに添うようにおま

もりくださいました御身様が、ただ、故郷ふるさとをおなじくした、おさな友達であるという理由ばかりで、あのように親切におちからをかしていただいたかと思ひますと、そういう思ひの外側にきりと光るものを感じられるのでございます。それは何物であるかという問いよりもきつと御身様のお眼のかがやきがわたくしの胸に残っているためとより外に考えようとでもございせん。

さて、わたくしは或る夜ふしぎなひと一つ家やに立ち寄つて見ましたが、それは何の不思議さもない、普通のお百姓家であつたことを知りました。年老いた媼おうなは普通の土器かわらけよりも大きい灯火ともしをかか
げていることが、奇異であるとすれば、全く奇異に大きい灯ともしびで
ございました。わたくしはそれを問たずねて見ないあいだは心の落着

きをとり入れられませんか、老嫗ろうおうにこう尋ねて見たのでございます。

「卒爾そつじながら灯びは民家にあるものより大きくはございませんか。
」

「お気づきでしたかお姫様、これは夜に都にのぼる旅の衆の心たのみにしているのでございます。しかし夜中じゅう点ともしているわけではございません。」

「旅人はよく尋ねて見えまするか。」

「はい、三日に一度くらいの割合で道に迷うて尋ねて見えられます。しかしさてあなたさまは？」

老嫗は息を入れて森しんとした眼付で彼女にいった。

「あなたは永い間往還おうかんをゆききしてござったが、あれはおそらく百日のあいだでござりましたな。」

「よくござんじでいられる。」

「あなたがお館をお出になるのがたそがれでござったゆえ、永い間には、もうお顔までおぼえてしまいました。」

「遠目でよくも顔までお見えになられた。」

「それは毎日の夕方ゆえでございました。もうお出になるころだところこの柱にもたれて見渡していますと、きまってお館の戸が開かれました。そしてあなた様はその戸を細ほつそりとお立ち出いでになられました。」

「よく見ていてたまわりました。」

「はじめは戸がきしんでそこだけが悪くなっているのではないか
と思うくらい、窮きゆうくつ 屈くつげに出られるのが気になつていたのでご
ざいますが。」

「館を出るときにはいつも慥どうき氣がいたして、すぐには、出られな
いような氣になつていたのです。」

「きつとそれは思い詰めていて、きゆうに、その思いつめたもの
から離れられない証拠かもぞんじません。そしてあなた様は原を
よぎつて往還に出られるあいだ決まつて二度は館の窓をお見上げ
になる、館の蔀しとみは下りていまするのに、それがお氣になるのかと、
わたくしめはそう眺めていました。川をお渡りになるときに、風
はいつもいたずら好きにあなた様のくろがみをなびかせて参りま

す。それから衣裳をきらきら光らせていますのが、残んの光に美しく見えてまいります。それより何という数多いご衣裳でございましょう。」

老嫗は目にあまる衣裳のうつくしさを、どういったらいいか、まようているくらいであつた。實際、彼女は毎夜ごとに衣裳をとりかえ、帯をかえ、^{うちぎ}桂をかえたのだつた。そうでもしなければ到底着つくせないほどの、^{りようらん}撩乱たる^{おんぞ}御衣は、もう着る機会さえもないような気がしていた。彼女は子供のようにそれを見てもらいたかつた。見る人は生きているわけではない、また、實際に見られているわけでもない、しかし、それをそうしなければいられないところに、彼女の息つくやさしさがあつた。きつと見ていた

だけるし、きつと、見てもらえるようにするという^{いのり}袴めいた心は、すこしも怠けることなく衣裳をとりかえさせたのであった。この心をつきつめたところにあらゆる彼女の用意ある、和歌のようなただよいがあつたのだ。

「わたくしは百日の間に着たような機会が、ふたたびわたくしの衣裳の上にあるうとは思われません。」

「ご免あそばせ、わたくしがあなた様の御本心に^{たど}辿りつくまでには三日も四日も考えつづけて、やっとあなた様がお方様のためにそのようなご衣裳をお取りかえになることを知ったのでございます。そして自分でもほつと致したほどでございます。」

「それは^{はず}差かしいこと、二度と口にすべきことではないかも知れ

ませぬ。」

彼女は誰だれも知らない夜歩きが、こういう遠くの一つ家から見まもられていることに、羞はにかみと不思議さを感じた。

「それから今ひとつ申し上げたいことがございます。」

「それはいかなる事。」

彼女は面おもてを立てなおした。

「一昨年おとしの秋あたりから都から立派なお方様が夕方車を召してお通いになつていたことがございました。」

彼女はからだじゅうが冷たくなるほど驚きに圧せられた。

「あのお方様はあなた様の何にあたらせられます。」

「夫にございます。」

「これは恐れ多いことを申し上げました。したが、去年十一月ころからはたりとお姿を見ないようになりましたが、ひそかに、もしやと不吉な考えをわたくしめが持っていたのでございます。」

「十一月の二十三日にご他界になりました。」

彼女は眼をしばたいた。此処ここにいて紀介を見ていた人があつたのかと、一つ家のともしびにえにしのなかつたとは、いえなかつた。

「わたくしめも、それからあとのあなた様の夜歩きも、百日のおん供養くようだというふうに拝していました。」

「その願明がんめいけも近いうちに廻めぐつてまいります。」

「えにしというものの深さと手近いことは、まったく眼にとまら

ぬほどにございます。都からのお方様は二度ばかりおたずねがございました。」

「まあ、それは。」

彼女は益々驚きに惹き入れられ、手につめたい汗を感じた。

「一度はあなた様のお館の位置をおたずねになり立ち寄られ、わがつまに当たるものであるがとの仰せにございました。」

「あとの一度は？」

「あとにお尋ねあったときは出水や近火のあった折、そちの屋敷にとどめてくれるようにと、ねもごろなお托みでございました。その折にいただいた黄金もいまだにたいせつに所持いたしております。」

彼女は胸のうちで紀介さま、かくも、お心づくしを忝うして
ながらいまごろになり気づいた心のぬかりをおゆるしあるように、
と、よく細かいことに気づく紀介が、ここまで心をくだいて深い
用意をしていてくれたかと、胸もとがこころよく緊つてくること
を感じた。

「しかし出水もなく近い火の過ちもなかったかわりに、もう、お
姿を拝むことがなくなりました。あのよう^{すこ}に健やかに亘^{わた}らせてい
ながら、あえなくなるとは、人のいのちの脆さ^{もろ}がはかられませぬ
。」

「それは何時^{いつ}ころのことでしたらう。」
「昨年の春もやっと三月になったばかりの日にございます。あな

た様には何ともわたくしめのことは、お仰せになりはしませんでしたか。」

「いいえ、少しも。」

彼女は思いあてていった。

「事あらば近い家をたずねて救いを乞われた方がよいとだけ、申していたようにおぼえております。」

「それはわたくしめの家を指してそう仰つたにちがいございません。ここからはお館が近うございますゆえそれに、お方様がお越しになられた夜はあかあかと灯びが、西にも東にも点れていたようにおぼえております。そして間もなく灯びが消えたしばらくの後に、往還におくるまの音がいたしてまいりました。わたくしめ

は不倖な生涯をおくつたものの一人でございましたから、お方様とあなた様のあまりにもお美しいくらしを、ひっそりと胸に抱いてやすんでいたのでございます。わたくしに一人の子供もなく、母親になる資格としてはございませんけれど、恐れながら母の持つ、そういういたわりを感じることで、自分もいつもふくよかな睡りねむにつくことができていたのでございます。」

「そのお言葉にはお礼を申しつくせないくらい、忝かたじけない思いがいたします。ご老嫗ろうおうさま、いまから後はえにしなき、わたくしどもではないことを承知あるように。」

「お姫様、それは勿もつた体ないおことばでございます。」
こうして一つ家の老嫗と相知ることができ、永い間頭にあつた

一つ家というものを知ることができました。えにしは、何処いずこにも宿り、何処にもつながりを見せるものに思われます、あそこに紀介様がお越しになったばかりではなく、かげながら後事こうじを托たくされていたということも、わたくしには、えも言われぬ美しさの本物にふれたような気がいたしてまいります。わたくしは決してふしあわせとか、はかないとか、どうしたらいいかという目標のないことを申したくありません、申しようもございません、恐らくわずかばかりではありましたが、紀介様との生活のこまごまとしたものまでが、かえってわずかな間であっただけに、一つも取りおとすことがなく、みな、集めてたのしくくらししていたようにおぼえます。人は永い間のしやわせを取りとめるには、なかなか

に艱難かんなんなものも前にも後にも待ち伏せにしているものでござい
ますから、短い間であつたためにも、いろいろな、しやわせがお
とずれて来たように思われるのであります。それは、それは、し
やわせ過ぎるわたくしだつたかも知りません。

きようこそお話し申し上げようとしながら、つい、また、ほか
のことを書いてしまいました。きようこそはと何時いつでも書きかけ
ながら話の本統にふれないでいて、わきみちのことばかり書いて
いるのは、一体、どうしたものでございましょう。別に心でそれ
を避けるわけでもありませんのに話はいつでも外それて行つてしま
うのです。保則様、いつか、きつとお話する機会のあるまでは、

たずねないで下さいと申し上げたことも、きょうお話しいたそう
としますそれなのでございます。それは紀介様がもうだいぶお悪
くなつていて、そしてそのなかでも大変ご気分のおよろしげに見
える或る日のことでございました。昼下りのうらかな日のさす
寝殿しんでんでいつになく

「山吹」
やまぶき

と、お呼びになるお声がきこえて来ました。そのお声はいつも
とちがった改まった、いかにもご用ありげなお言葉に冴さえたところ
ろがございました。うろたえて参りますと、紀介様は晴れやかな、
何ひとつ曇つたところのないお顔付でいられました。それはお心
もそのように晴れやかであることに、すぐ、気づくようなお元氣

さでございました。

「いつかの若い武士のはなしなんだが、あの人から便りがあるか」
「」

突然なおたずねだったものでございますから、あるいは、わたくしはその折に顔をあからめたかも知りません。あまりに不意な、あまりにだしぬけでございましたから、故意にそう仰せられるのではないかと、そうも取れるのでございました。

「あれ以来おたよりとは、絶えてございませぬ。」

わたくしは言葉をついでおたずねしないわけには行きませんでした。
した。

「いまごろ何故なにゆえそうおたずねでございます。」

「それについてそなたの気を悪くしない程度で、きいてもらいたいことがある。」

そう仰おっしゃ有る紀介様のお顔にも、依然、少しもみだれた色がかばないでいて、かえってお眼はやわらかに澄んで見えていました。

「いかがなことでございましょうか。わたくしに關すること何か……」

「氣にかけてはいけない、少しも氣にかけることではないのだ、ただ、あの武士がいまだに丈夫でいるならば、わが亡き後にそなたの処ところを知らしてやれと申したいのだ。」

「それはまた何故にございます。」

「そなたの身をまもる人がいなければならぬからだ、それには、そなたのしたい人でなければ親身になって身をまもってくれぬからだ。」

わたしはこうべを垂れてだまってしまいました。やつと、わたくしの口をついで出る言葉は、ただのひと言に尽きているのでございしました。

「そのようなことは再度^{にど}とおはなしくださいませんよう、あらためて山吹から申し上げとうございます。」

紀介様は手をふってそんなに神経質になってくれては、こまる^{おっしや}と仰有^{おっしや}られました。

「決してそなたにやきもちをやいているのではない、よくお聞き

あれ、人というものはその終の日に近づいてゆくと、氣持が澄んで一点の濁りもないところに、ようように^{たど}辿りつくものらしいのだ。わたしはいま、^{ちやうど}恰度、そういう境にいるのだ、そこからお前を見つめていて、何が祈られるかそなたに分るか、何がそなたの生涯をふくよかにするかが分れば、それを選ぶということが自然になされることではないか。」

「それでもわたくしは、そのようなお言葉をお聞きするのがつろうございます。」

「それはそなた自身が心をくるしめるように考え込むからいけないのだ、わしの顔や眼つきをごらん、何一つ^{やま}邪しいことは考えていない、そなたももっと大きい心になって聞いてもらわないとこ

まるのだ。」

「はい。」

「つまりわしは何を眼あてにして死のうとしているのか、それが分ってくれば有難い、人は死ぬことにすら目標がいる、死ぬ奴には死ぬために生きるものがほしくなるのだ、つまりそなたをわしの信じた人につきあわせるということだけで、どれだけわしの心が広くはれやかになるか分らない、ただ、そのままのそなたを見る不安をまぬがれることが、わしには必要なのだ、そなたの身をまもるには、若い武士より外に人はいない、ほかにそなたに近づく人がいるという考えを、わしは信じないしそういう考えを^{しりぞ}けたいのだ。」

「はい。」

「あの若い武士をひと眼みたときから、わしの心にはやきもちが起らずに、しずかな友達としてのよしみが感じられた。決して悪い人間ではない、むしろ、よい人間の質を感じた。そなたに近づいているほどの人間にはそれだけの資格がいる、それをあの若い武士は智恵や容貌の点からもしくも持ち合していた。よい人間にはよい人間が近づくといい、運命的なものさえ感じられた。世界の何びとよりも、そなたのいろいろな相談事はあの若い武士の胸の内にあるとっていいのだ。そなたが故郷人^{ふるさとびと}とか幼な友達とかいう考えからでなくとも、ついに人を選ぶとしたら、わしでなければあの若い武士より外には、人という人は見当らなかつた

であろう。」

わたくしはうつ向いたままの、顔をあげることすら出来ませんでした。じっと見つめている床のうえがきゆうに明るくなったように見え出して来ました。子供の折に眼をつぶっていきゆうに開けたときの、ああいう明るい眩まぶしいものさえ感じられて参りました。お羞はづかしいはなしですけど、紀介様のしばしば仰おほせになるああいう言葉には、やはり嫉妬のようなお心が雑まぎっていると考えていましたわたくしは、そういう考えがはずかしくてならなかったのでございましたけれど、それをどう改めるわけにも参りませんでした。どれほど心を正しく引きもどそうといたしまして、邪念は依然わたくしから意地悪く去ってはいくれませんでした。

それがどうでございましょう、いま紀介様がこう仰おつしや有つていられますあいだに、あまりにもはつきりと人間の一等高い心というもののありがた、それが病んでいる人にとって病んでいるという大変に悲しいおしごとの数々が、だんだんに重なり積み上つて遂つひにきょうの紀介様のお言葉にあらわれたと申していいような気がします。ここまで紀介様は平然と歩いて来られ、そのために少しもお心をいためはなさらなかったことさえ、わたくしには人の心の偉さが感じられてまいりました。かえつてわたくしにそれをお明かしになることが、御気苦労があつたように思われます。それはわたくしの至らなかつたことばかりでなく、わたくしはまだ紀介様のような愛情の高さにまで及びつけないでいたからでござ

います。山々に入りお薬をとっていたわたくしのあるかないかの苦心よりも、紀介様はお床のうえでわたくしの十倍も二十倍も高いところにお上りになり、わたくしを見つめていられたのでございました。

「山吹、わしのいったことがよく分ったか。」

わたくしは何の躊躇ためらいもなく、手について申し上げました。

「よく分りましてございます。」

「あの武士はいま何処どこにいるのか。」

「故郷にいらつしやるように思われます。」

「川べりの何とかいったな。」

「立田たつたがわ川でございます。」

「あそこの景色はいまも眼にあるね、景色というものは見たときよりも、思い出すと美しい。」

紀介様のお顔はやはり平明な落着きを見せていられ、わたくしに言いたいことを仰おっしや有ったあとの満足さでかがやいていられました。およそ立派という言葉は、こういう時にその意味をあらわしてくるような気がいたします。

保則様、きようは思い切って申し上げることも、心置きなくおつたいいたしました。もう何も申し上げることもございません、いつもお越しくださるようお手紙をいただきながらそれのお返事もいたさなかったのもこれらの気持をおあかししたあとで書こうと考えていたのでございます。もしおたずねくださるようなれば、

いつにてもお越しく下さいませ、むかしのような山吹が一人いるきりでございます、むかしも今も、ここまで来てみれば、どれだけでも變つていようとは思われません、變つているのはかえつてわたくしより外の人かも知りません、外の人も變つていないのかも知れませんが、ただ、人間はその氣持のうごきによつて、變る變らないという二つのことがらが決るのでございましょう。もう、松並木には春の日がうららかに当り、こうこう皓々たる音すら冬ほどの厳しさがなくなりました。土手、小さい丘、原、こみち小径、そういうきれぎれの景色にすら、春はゆたかにしるされています。どうぞ、遠慮なくお越しく下さいませ、ひと一つ家やへも、館のうちのお庭にも、かつての山吹がごあんない申しあげ、かたわら故郷のおたよりも

聞きたいと、それのみを念じ上げまいらせます。

青空文庫情報

底本：「犀星王朝小品集」岩波文庫、岩波書店

1984（昭和59）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年1月16日第6刷発行

底本の親本：「室生犀星全王朝物語 下」作品社

1982（昭和57）年6月

初出：「婦人画報」

1946（昭和21）年3月号

※表題は底本では、「玉章《たまずさ》」となっています。

※初出時の表題は「春御衣《はるおんぞ》」です。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2014年3月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

玉章

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>